

天守の構造の概要

総延面積 698.775㎡

天守の形式 望楼型

外観

◇3重 高さ19m

内部4階

地下2階(石垣の中)



1階

◇納戸の間(282.752㎡)

中央部は4室に区画されており、その周囲には2間幅の武者走(通路)がめぐります。上段の間は床が7寸高く畳敷で、室内には床や欄などがもうけられています。昭和の解体修理で、明治24年(1891)の濃尾震災により破損したという南東隅の付櫓(15.22㎡)と北西隅の石落としの間(7.17㎡)を復元しました。



2階

◇武具の間(246.006㎡)

中央に武具の間があり、東・西・北の3方に武具棚を設けています。解体修理で発見された墨書銘から延宝3年(1675)に設置されたものであることがわかりました。

3階

◇破風の間(81.936㎡)

入母屋屋根の中に位置します。創建当初は2階の屋根裏でしたが、増築に伴って3階となりました。南北には唐破風が設けられています。



4階

◇高欄の間(49.835㎡)

高欄の間の4方には約半間の廻縁がめぐり、高欄の間の南北に出入口があります。出入口の左右には装飾化した花頭窓が配置されています。



天守の石垣

石垣の高さは5mで、自然石をほとんど加工しないで積み上げた野面積みという工法です。

犬山城の沿革

犬山城は織田信長の叔父である織田信康が天文6年(1537)に木之下城を移して築城したと伝えられています。

こののち江戸時代初期にかけて城主はめまぐるしく入れ替わりました。

天正12年(1584)小牧・長久手合戦の際には羽柴(豊臣)秀吉は大軍を率いてこの城に入り、小牧山に陣をしいた徳川家康と戦いました。

江戸時代になり、元和3年(1617)尾張藩付家老、成瀬正成が城主となってからは成瀬氏が代々受け継いで幕末を迎えました。

明治維新に犬山城は廃城となり、天守を除いて櫓や門の大部分は取り壊され公園となりました。

明治24年(1891)の濃尾震災で天守は大きな被害に見舞われました。同28年、愛知県から修復を条件に旧城主である成瀬氏に譲渡されました。また、多くの市民からの義援金により修復工事がおこなわれました。その後、昭和34年(1959)の伊勢湾台風などで天守の破損が激しくなったため、全面的な解体修理工事がおこなわれました。

天守は昭和10年(1935)に国宝に指定され、同27年規則改正にともない再指定されました。また、天守の創建年代は天正(1573~92)頃、慶長5(1600)・6年などいくつかの説がありますが、現存する天守の中では最も古いと言われています。

現在、犬山城天守は犬山城白帝文庫の所有となり、犬山市が管理をおこなっています。

お問い合わせ

犬山 城 管理 事務所 TEL.0568-61-1711

〒484-0082 犬山市大字犬山字北古券65番地2

公益財団法人

犬山城白帝文庫 TEL.0568-62-4700

〒484-0082 犬山市大字犬山字北古券8



記念スタンプ・メモとしてお使いください



別名 白帝城
犬山城 国宝



National Treasure
Inuyama Castle

公益財団法人
犬山城白帝文庫歴史文化館へ

ようこそ

慶長15年(1610)頃、徳川家康の9男義直が尾張へ移封されると成瀬正成はその傅役となります。まだ幼い義直にかわって、尾張藩政を委ねられていた平岩親吉が同16年に死去し、その翌年から正成は竹腰正信とともに尾張藩の付家老として政務に携わりました。元和3年(1617)、成瀬正成が2代将軍徳川秀忠から犬山城を拝領して以後は幕末まで代々、城主と尾張藩付家老を務めました。

明治24年(1891)の濃尾震災をきっかけに再び成瀬氏が天守の所有者となり平成16年(2004)までの長きにわたり個人所有の城として知られてきました。

犬山城白帝文庫は、国宝犬山城天守および旧犬山城主成瀬家伝来の古文書・美術工芸品等を調査研究・保存・公開し、犬山の文化発展に寄与することを目的として平成16年4月に設立されました。



小牧・長久手合戦図 江戸時代



黒塗菊桐蒔絵鎧櫃 桃山時代



白熊毛兜 江戸時代



成瀬正成書状 江戸時代

歴史文化館では所蔵資料を常設展示するとともに年2回、企画展・特別展をおこなっています。